ワークショップ「多角的な視点から見た日本語のモダリティ」

野田尚史（国立国語研究所）

1.日本語のモダリティを多角的な視点から見る必要性

日本語のモダリティ研究は 1990 年代から隆盛を極め、現在も日本語文法研究の中心的なテーマの一つになっている。次のような研究をはじめ、これまでさまざまな研究が行われてきた。

仁田義雄・益岡隆志(編)（1989）『日本語のモダリティ』くろしお出版.
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版.
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
森山卓郎(他)（2000）『モダリティ』(日本語の文法 3)、岩波書店.
高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房.
宮崎和人(他)（2002）『モダリティ』(新日本語文法選書 4)、くろしお出版.
日本語記述文法研究会(編)(2003)『モダリティ』(現代日本語文法 4)、くろしお出版.

「陳述論争」が盛んだった 1950 年代の陳述研究は観念的なものも少なくなかったが、現在のモダリティ研究は具体的な言語事象を掘り起こし、それを丁寧に記述するものが多い。そうした研究によって特に現代日本語のモダリティについては十分な研究の蓄積ができており、新たに画期的な研究を行うことは難しい状況になってきている。

このワークショップでは、日本語のモダリティそのものを研究するのではなく、他のさまざまな要素との関係を見ることによって、モダリティ研究の領域を広げる試みを行う。具体的には、(1) から (4) のようなことである。

(1)　質問が上昇イントネーションで表されるように、一部のモダリティは音声と密接な関係を持つ。そのようなモダリティとイントネーションの関係を明らかにする。
(2)　一部の名詞修飾節の中では、文末とは違い、現れるモダリティに制約がある。そのようなモダリティと名詞修飾表現の関係を明らかする。
(3)　「さえ」や「でも」など一部のとりたて表現は、特定のモダリティと呼応する。そのようなモダリティととりたて表現の関係を明らかにする。
(4)　人間の脳の中でモダリティがどう処理されているのかは、まだほとんど解明されていない。脳科学の手法でモダリティを考察する。

2.ワークショップのスケジュール

このワークショップは、次のようなスケジュールで行われる。

15:00～15:10　趣旨説明（野田尚史）
15:10～15:30　モダリティとイントネーション（窪薗晴夫）
15:30～15:50　名詞修飾表現から見たモダリティ（益岡隆志）
15:50～16:10　とりたて表現から見たモダリティ（野田尚史）
16:10～16:30　脳科学から見たモダリティ（原由理枝）
16:30～17:00　フロアとのディスカッション